新春

技術営業でユーザーに寄り添う

川﨑 信明

受注自体は好調ですが、世界的な資源不足、特に半導体不足の影響からさまざまな工程が遅れはじめ、特に車両メーカーのシャーシの遅延により、納期遅延が発生しており、ご迷惑をお掛けしております。可搬式給水タンク、設置型組立式給水タンクはおかげさまで順調ですが、来年も見通しはあまり楽観できませんが、それに対応しながらバランスを取っていければと思います。

車両一体型給水車のお話をいただいた場合は、お客さまと綿密に打ち合わせ、どんな機能がご必要なのかを徹底的に話し合い、原案を作製しニーズに合わせた車両一体型給水車を考えます。予算もあるでしょうし、補助の兼ね合いもあるかと思った仕様になっています。通常使用はコストを重視し、漏水工事などに使用するものです。

今最もお話を多くいただくのは、各地で協定が締結されることに伴った災害派遣用の給水車ですね。昨年は和歌山に続き、千葉県や北海道でも水管橋が崩落しました。これまでは何リットル必要なのかがボタン一つで行えます。車もマニュアルからオートマチックになりましたが、給水車も同じような流れの中から、フルオートマチックという考え方が生まれたのです。

ただ、すべてフルオートにしてしまうとベテランの人が操作について来なければ、要望です。コストがかかっても使いやすいものにするのか、あるいはブラッシュアップして最低限の装備でいくのか。お客さまと打ち合わせをして一緒に製品を作り上げていくか。やはりお客さまの要望を聞かないといいものはできないと思いますね。スローガンを掲げるような会社ではありませんが、現在、同軸押輪類シリーズの上水道継手類、車両一体型給水車、仮設式給水タンク、可搬式給水タンクに続く次の製品も考えています。次の東京水道展ではお披露目できるかな、と考えています。

私も現場が好きですので、時間さえあれば現地に行ってお話をして新たな製品開発に臨みます。水道の業界は広いようで意外に狭く、例えば給水車を1台納入した事業体が相談を受けて他の事業方が多いことも課題です。普通免許、しかもオートマチック免許限定しか保持していないこともあります。このため、事業体側も普通免許の取得を必須としたり、免許取得を義務付けたりするケースも増えてきました。

現在の普通免許では総重量が3・5㌧未満の車両にしか乗れません。大都市圏以外の自治体は職員の人数が少ないですから、旧免許対応の給水車だと課長や部長しか乗れないという例も出てきてないという事態になっているかと思いますが、その課題を解決するために何ができるかを日々考えていきたいと思います。

今後も同軸押輪を含む上水道機器、車両一体型給水車を含む応急給水関連機器を販売しつつ、水道界全体の方向性を探り、得た情報を地道な営業活動で伸ばしていきます。昔ながらのやり方ですが、人と人とのつながりでサービスや製品を売っていくことが近道ですから、お客さまとのお付き合いを何より大事にしていきたいですね。

さらにこれから自動車業界は大きく動きます。具体的には電動化の流れです。1日60～70㌔しか走らない給水車は電動でもいいのではないかという意見もあります。

ただ、給水車をはじめ消防車、救急車などの緊急車両が燃料がなく被災地で動けないということにならないよう、その中で当社のステンレスタンクにはこうした社会的使命がある。その使命を全うするために会社としてこういった方針を取り、その中であなたの仕事はこういう役割を果たしているので、特にここに力を注いで欲しい、といったことを社員に伝えながら、研鑽の機会を持ち、経験を積んでもらいたいと考えているところです。

一方で、職人は社外の現場で仕事をする時間の割合がかなり大きいですので、どういった手段でこうした情報を伝えていくかが課題です。当社の職人は若い人が多いことを考えますと、SNSを社員向けに活用することも一つの手段になると思っています。

■改訂版耐震工法指針への対応を契機に

昨年6月に日本水道協会が「水道施設耐震工法指針・解説」を改訂し、これによりステンレスパネルタンクなどの設計に新たな考え方が求められることとなりました。

私は昨年10月、社長に就任しましたが、ちょうどそのタイミングで新しい課題が出てきたということで、今年はこれに対応することが言わば試金石だと考えています。

お客さまに高い価値を提供する会社であり続けるためには、時代の要請に合わせて変化し続けることが一番大事だと考えています。当社は、長年ステンレスの容器に携わってきた企業として、新たな課題に対応できる歴史と力があると思っていますし、また、新たなチャレンジをするきっかけでもあると前向きに捉えています。

当社は、水道事業と民間の建築設備事業の両方のノウハウがあることも強みだと思っています。

建築設備事業でのタンク設計・施工の方法についてさまざまなご要望があるのですが、こうしたご要望にお応えする中で、水道事業にも応用できるようなノウハウを蓄積してきましたし、その逆の例もあります。当社の水道事業の設計部門と建築設備事業の開発・設計部門は同じフロアにありますので、相乗効果を発揮しやすい環境が整っているものと思っています。

また、当社の福島工場には高性能な振動台を所有しています。これまでも動的解析やシミュレーションの結果の照合等で活用してきましたが、今後も産学共同研究での耐震実験を行うなどして、ステンレス配水池を中心とした製品の改良・開発に活用していくつもりです。

当社は、日本ステンレスタンク工業会の会員でもあります。今後、業界団体であるこの工業会の中で新たな課題に対する知見を共有し、深めていくこととしていますので、当社もこれに参画していきます。

これから、円筒形のステンレスタンクに注目が集まっていくものと考えています。これまでも当社は円筒形タンクを設計・生産・施工してきましたが、今年は需要増に備えて生産設備等への積極的な投資も行います。

■お客さまの選択肢を充実

繰り返しにはなりますが、今年は改訂版の耐震工法指針の性能要求に対して、社内での勉強会や設備投資、産学連携の共同研究、そして工業会への参画の3本柱で対応していきます。

先ほど円筒形タンクについて話しましたが、矩形タンクについては厚板タンクの改良も進めていく予定です。部材は、ガードレールのような形をイメージしていただければ近いかと思います。

このように、総合ステンレスタンクメーカーとして、お客さまの選択肢を増やすために、今年1年注力してまいります。

本年もよろしくお願いいたします。

新たなチャレンジの年に

耐震工法指針の改訂が試金石

竹下 和彦　ベルテクノ　代表取締役社長

■過去最高の需要に応えた1年

当社は9月が決算期になりますが、2022年9月期の業績は、ステンレス配水池をはじめとした官需が牽引し、過去最高となりました。ステンレス製タンクが持つ耐久性の高さや施工性の良さ、維持管理の手間の軽減といった特長へのご理解をいただけた結果だと思いますし、私たちもステンレスの素材の良さを引き出せるように日々、研鑽しています。

お客さまからの数多くのお引き合いに良い品質にてできるだけ早くお応えするため、一所懸命、生産・施工に努めた1年だったと言えます。良い品質の製品をお届けすることも当然のことですので、高い技術が求められるステンレス薄板の溶接に対応した職人の確保と育成は、常に最重要課題としています。溶接のみならず、設計や各部品製造時のプレス工程など、すべての工程において品質確保と改善に取り組んでいます。

昨年度は新たな職人を採用して職人数も増やすことができ、国内グループ全体で社員数400名を超えました。振り返りますと、これまでの努力が一定の成果を実らせた年だったかと思います。

■社員のモチベーションを一番大事に

当社は今から76年前、繊維・織物産業の一大都市である愛知県一宮市にて、染色整理機械の製造販売会社として創業しました。昭和32年には高温高圧染色機を開発し、労働省から第一種圧力容器の製造認可を受けました。その後、住宅設備機器を手掛け、その中でホーロー浴槽やステンレス浴槽などの容器の製品を開発してきました。昭和53年にステンレスパネルタンクを開発し、配水池や民間施設で幅広くお使いいただいています。

長年、容器製造、その中でも、約半世紀ほどステンレスタンク製造に携わってきた会社として、その歴史に恥じない品質の製品を作り続けるために工場の設備は常に老朽更新と最新化を行い、あらゆる工程の改善にも努めています。

しかし、品質が高いモノづくりのために最も大事なのは、そこに携わる社員です。職人のみならず、製品の価値を訴求する人、製品を設計する人、施工現場を管理する人、会社運営を支える人、こうしたすべての社員を大切にしていかないと、高い品質の製品・サービスを提供し続けることは難しいと思っています。

特に働く社員のモチベーションが重要だと思っています。お客さまに当社の製品をお選びいただくことはありがたいことですし、それとともに、社員に働く場として当社を選んでもらうことも大切だと考えています。

そのために、日本の水道事業はこういった現状にあり、その中で当社のステンレスタンクにはこうした社会的使命がある。その使命を全うするために会社としてこういった方針を取り、その中であなたの仕事はこういう役割を果たしているので、特にここに力を注いで欲しい、といったことを社員に伝えながら、研鑽の機会を持ち、経験を積んでもらいたいと考えているところです。

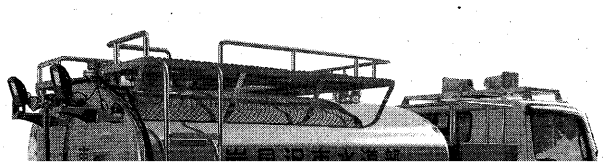
一方で、職人は社外の現場で仕事をする時間の割合がかなり大きいですので、どういった手段でこうした情報を伝えていくかが課題です。当社の職人は若い人が多いことを考えますと、SNSを社員向けに活用することも一つの手段になると思っています。

■改訂版耐震工法指針

繰り返しにはなりますが、今年は改訂版の耐震工法指針の性能要求に対して、社内での勉強会や設備投資、産学連携の共同研究、そして工業会への参画の3本柱で対応していきます。

先ほど円筒形タンクについて話しましたが、矩形タンクについては厚板タンクの改良も進めていく予定です。部材は、ガードレールのような形をイメージしていただければ近いかと思います。

このように、総合ステンレスタンクメーカーとして、お客さまの選択肢を増やすために、今年1年注力してまいります。

本年もよろしくお願いいたします。

Kawasaki Kikou
当社は、水道業界で60
昨今の自然災害に対応
KEK型 車輌一体